東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

東北大学附属図書館本館の建物について：建築家鬼頭梓の設計思想

著者	吉植 庄栄，佐藤 貴啓，渡辺 真由，上田 夏実
雑誌名	東北大学附属図書館調査研究室年報
号	5
ページ	49-64
発行年	2018-03-22
URL	http://hdl.handle.net/10097/00122449

東北大学附属図書館本館の建物について：建築家鬼頭梓の設計思想

吉植　庄栄[1]，佐藤　貴啓[2]，渡辺　真由[3]，上田　夏実[4]

1．はじめに

東北大学附属図書館本館（以下，当館）は，昭和48(1973)年に開館した（写真1)。[5] 片平にあった附属図書館と現在の川内北キャンパスにあった教養部分館の二つの機能を統合した，全く新しい図書館としてスタートした当館は，長年の全面リニューアル工事を終え平成26(2014)年10月から，新たな営みを続けている。当館の建物は全面リニューアルを経たとはいえ，外見は開館当時とほぼ変化は無く，また館内の構造に関して言えば，最小限の改修に留められている。

面白いことに，筆者が見学者に，当館は45年前に建てられたものの，基本構造が開館当時からあまり変化していないことを説明すると，一様に驚く。全面リニューアルを経たものの，45年前の考えは引き継がれており，古さを感じさせないことを強調すると，一様に驚嘆の表情を浮かべたり，どよめきが起きたりするのだ。これはつまり，当時の設計思想が，現在の高度情報・知識社会でも十分に通用するものであることの表れではなかろうか。

それでは，当時の設計思想のうち何が現代にも通用する点なのであろうか。何故約半世紀前の建物が，新しさを感じさせるのであろうか。

本稿は，当館の見学を担当する参考調査係に席を置く者として，今後見学誘導担当者の参考になるように，そして当館の設計思想を知りたい人のために，設計主任であった建築家鬼頭梓（きとう　あずさ，1926-2008）の図書館建築の思想をまとめ，当館新築の過程を踏まえながら，比較するものである。

写真1　開館当時の当館：手前のメタセコイアの木が非常に小さい

1　東北大学附属図書館情報サービス課参考調査係長
2　東北大学工学部（ワークスタディ）
3　東北大学薬学部（ワークスタディ）
4　東北大学経済学部（ワークスタディ）
5　日本図書館協会編．図書館建築図集 ’79．日本図書館協会，1979，p.115.

2．建築家　鬼頭梓の世界

2.1　鬼頭梓の生涯[6]

鬼頭梓氏は，昭和元(1926)年 1 月 15 日に，東京府北多摩郡武蔵野村吉祥寺（現　東京都武蔵野市吉祥寺）に産まれた。父の忠一は，早稲田大学政治経済学部を卒業後，大隈重信の秘書を経て山下汽船に勤め，鬼頭氏が産まれたころは，東京市政調査会研究員であった。大変語学が堪能であり，英独仏露伊の五か国語の読み書きができたという。この忠一氏の 3 番目の子どもとして，鬼頭氏は産まれた。兄と姉，そして弟の 4 人兄弟である。東京府立第一中学校（現　東京都立日比谷高等学校）から第一高等学校（旧制）に進学する。一高在籍中は太平洋戦争の真っただ中であり，日常生活が破壊されていくのを鬼頭氏は，目の当たりにした。

戦争中に，東京帝国大学の人類学教室に進学するが，戦争終了後，＜極当たり前の生活の根拠地を作る＞ことへの関心から当初志望した建築を学びたくなり，工学部建築学科に入り直した。しかし戦後の混乱期に結核になった弟の看護のため，一年休学を余儀なくされる（翌年死去）。

昭和 25(1950) 年に東京大学第一工学部建築学科卒業後，前川國男事務所に入所する。前川國男(1905-1986) は，フランスの建築家ル・コルビュジェ(Le Corbusier，1887-1965) などに習った，モダニズム建築の大家である。＜人間の生活の展開＞としてプラン＝平面計画を重視する前川の姿勢から，鬼頭氏は多くを学んだ。前川事務所時代には，図書館建築の分野で，神奈川県立図書館や国立国会図書館の設計を手掛けている。

鬼頭氏はこの前川事務所に 14 年在籍後，独立して鬼頭梓設計事務所を立ち上げる。本人自身は，図書館は嫌いであったそうだが，将来結婚する當子（まさこ）氏と宗教音楽研究会で出会い，影響を受け図書館への関心を深めていく。なぜなら，この當子氏は，慶應義塾大学文学部図書館学科で学び，国際基督教大学図書館に奉職し，後に館長まで勤める人物であるからである。

独立後，昭和 37(1962) 年に東京経済大学図書館[7] の設計を手掛ける。この図書館（写真 2）は，全面コンクリート打ちっぱなしのもので，柱を少なくし，書庫を地下に置いている。この建築は，日本建築学会賞を受賞し，図書館界でも評判になったという。

写真 2 東京経済大学図書館

6　鬼頭梓＋鬼頭梓の本をつくる会．建築家の自由：鬼頭梓と図書館建築．建築ジャーナル，2008，103 p.

7　当館がモデルにした東京経済大学図書館は，写真を見て分かる通り，デザイン・構造において非常に似通っている。平成 26（2014）年 4 月には，東京経済大学に新図書館がオープンし，同年秋に元の図書館は＜大倉喜八郎　進一層館 Forward Hall ＞として生まれ変わった。なお写真は，以下から引用した。
鬼頭梓ほか．建築家の自由．2008，p.47，p.50-51.

当時は建築設計側と図書館員側は，あまり仲が良くなく，お互い疑心暗鬼の状態であった。それに反して「ふだん喧嘩するのに，両方が褒めてくれました。おかげでいろいろな方に見られて，次の仕事も来たんです。」と鬼頭氏は述懐している。その結果，当館の設計依頼に繋がっていくのである。

その後，山梨県立図書館（昭和45(1970)年），当館（昭和47(1972)年）の設計を経て，山口県立図書館（昭和48(1973)年）及び当時の日本の図書館活動を代表する，東京都日野市立中央図書館（同年）の設計に，携わった。日野市では，館長の前川恒雄(1930-)と盛んな議論の上に，内外の注目を浴びつつ＜人生を賭けた挑戦＞という意識で現在の建物を完成させた。

引き続き図書館建築に携わり，公共・大学等図書館の設計を30館以上行った。平成17(2005)年の函館市中央図書館の設計が最後の作品となる。平成20(2008)年8月20日に享年82歳で死去した。

2.2 鬼頭梓にとっての＜図書館とは何か＞

鬼頭氏は，図書館建築にあたり＜図書館とは何か＞という本質論，いわば図書館哲学のようなものを深く考えていた。それに基づき，館種や立地条件，建築の背景や依頼人の想い等を勘案して，建築プランを定めていったと考えられる。

> （公共図書館，大学図書館，学校図書館，専門図書館，本館，分館…）このようなさまざまな差異にもかかわらず，図書館はすべて図書館なのであって，そこには共通の本質とも言うべきものが厳として存在しているのである。それだからこそ逆にその本質が，それぞれの社会，それぞれの情況に対応して，千差万別の様態を生み，無数の個性を創り出しているのである。
>
> 図書館の建築を設計する者にとって，図書館とはいったい何であるのか，その本質はどこにあるのかという追求は，欠くことのできない重要な課題である。[8]

それではここで鬼頭氏が「厳として存在している共通の本質」[9]と述べているものは，一体どのようなものであろうか。鬼頭氏自身も「とはいうものの，私自身もまだ確乎とした哲学を有するには至っていない。」[10]と遠慮しつつも，次の点を挙げている。

(1)図書館は皆の共有の財産であり，皆が共同して利用するものである。[11]
(2)図書館は本の場所である。個人の書斎とは本質的に異なり，皆の共有財産としての本の場所である。[12]

以上の2点の本質に基づき，開架式に基づく本と人との交流する空間，図書館員がそれを媒介する空間を創らねばならない[13]とする。その際の原則が以下のものである。

(1)平らな床を持った広い空間（これを＜フラット・フロア，ノーステップ＞と称している。）を必要とする。
(2)図書館員のスペース，利用者のスペースを明確に区分する。
(3)図書館員のスペースと利用者のスペースとの二つの領域の接点には，カウンターが設けられる。
(4)館内での利用者の自由を最大限にするために，チェックポイントである入口は極力一か所にする。

とくに(1)に挙げた＜フラット・フロア，ノーステップ＞については，以下の理由も挙げている。

・図書館員の仕事量

図書館員の日常労働を大きく占めるものには，本の移動と整頓がある。その作業に使うブックトラックに本を満載すると，100kgを超える場合がある。そのような重たいものを動かし作業するのであるから，平らであること，段差が無い事は，非常に有益である。

・大量の開架資料の運用

開架資料は多ければ多いほど良いので，大量の資料を置くための場所は，平らな床を持った広々とした空

8 鬼頭梓建築設計事務所企画・編集．図書館建築作品集．鬼頭梓建築設計事務所，1984，p.8.
9 同上.
10 同上.
11 同上.
12 同書．p.9.
13 同書．p.12.

間が望ましい。それは大量の資料を適切に配置して，利用者にとって分かりやすく，利用しやすくするためであり，図書館員にとっても働きやすく，管理しやすいようにするためである。

・図書館を共有財産にする

床を平らにし，段差を無くすことで，足が不自由な人にとっても自由に使える図書館になる。

また，さらに進んで，鬼頭氏は次のように述べる。

> 階段のない図書館は，周辺の社会と同じレベルに，日常生活と同じ平面の延長上にその活動を展開させることとなったのである。その意味は大きかった。図書館が皆のものであり，皆が共同して利用することのできる場所であるということを，これほど端的に示したものはなかったからである。[14]

この通り，＜フラット・フロア，ノーステップ＞は，＜選ばれた少数の人々の場＞から＜民主主義に基づく皆の場所＞に転じた現代の図書館の象徴なのである。

以上，鬼頭氏の＜図書館とは何か＞をまとめた。これらを踏まえた上で，当館の建築過程を見る。

3．当館の建築略史

【附属図書館本館新営に関わる年表】

昭和39(1964)年	図書館移転計画の実行に着手（文・教・法・経の4学部の川内新営移転計画に含まれる。）
昭和41(1966)年3月	施設部第1案図面を作成
昭和44(1969)年8月	鬼頭氏に設計を委託
昭和45(1970)年11月	新営図書館の基本設計決定
昭和46(1971)年1月	起工式
昭和47(1972)年暮	建築完了
昭和48(1973)年11月	蔵書移転完了・附属図書館本館川内地区に新築開館

3.1　新館建築の経緯[15]

東北帝国大学の設立から学部の新設・再編を行う中で，明治44(1911)年に附属図書館も開館した。大正13(1924)年には現在の東北大学史料館本館となる建物が，小倉強氏の設計で建築された。これはネオ・ルネッサンス様式の洋館であり，戦前の帝国大学の性格から，資料集積の面でも，運営の面でも，研究機能中心のいわゆる＜研究図書館＞を目指して整備されていた。

しかし敗戦後，新生東北大学の発足後の教育改革によって教養部が成立し，附属図書館もその影響を大きく受けることになる。つまり，専門研究に導く前段階としての幅広い基礎教養図書や啓発的・一般的な専門研究図書を大量に集積する必要が生じてきたのである。大学の変化，学習方式の変化により，大学図書館は従前のような＜研究図書館＞のみの運営方式だけでなく，新しく教養部学生向けの＜学習図書館＞としての機能を明確に担う必要が発生したのだ。

これを背景に，当時の附属図書館本館では利用者スペースも蔵書許容量も，そして図書館員の作業スペースも手狭となったため，全学の中心的な大学図書館の新築構想が浮かび上がってきたのである。

3.2　図面の変遷[16]

当館の設計にあたり，合計17個の建築案変遷があった。その最初からの概略を，鬼頭氏の考えを知るという視点で，ここにまとめる。

3.2.1　施設部作成の図面

第1次案から第4次案までは，施設部と図書館が共同で作図していたものである。当時この両者とも新館建築にあたり，大変熱意を込めて議論を尽くしてこれらの図を作図していたようである。

14　同書，p.13.
15　竹内利美.「学習図書館」としての大学図書館 -- 東北大学付属図書館本館の移転整備に寄せて．図書館学研究報告, 1971, 4, p.1-23.
16　原田隆吉．東北大学附属図書館 -- 新営計画作業経過の大要．図書館学研究報告．1971，4，p.24-37.
　　原田隆吉．東北大学附属図書館の新営における設計図段階．図書館学研究報告．1974，7，p.268-157.

第1次案（図1）によると，業務・閲覧スペースは地上3階分を占める。2階がメインフロアであり，玄関が置かれる。書庫はこの建物の中央部分にあり，積層で地上6階建てのプランであった。興味深いのは教養部学生の入館を考慮して入口が北にも設けられていることをはじめとして，入口が複数個あることである。

以降の第2次案は，第1次案を拡張したものである。この案は，完成までの全ての計画図面を通して，最大の坪数であった。第3次案はそれをコンパクトにしたものである。第4次案は，ここまでの案の修正を行った上で，一応の成果としたようだ。

これら施設部と図書館員の協議の上になされた4つのプランに対して原田隆吉氏は，以下の様に総括を述べている。

> 要するに，施設部も図書館もひとしく熱心ではあったが，結局当時の図書館建築の常識とわずかの思いつきの線を動いていたといってよく，それにしては両者はお互いの専門的能力を信頼して相応に思いきったプランをひいているというのが実情である。そこでくわしく見ると図書館的なものと一般事務的なものとがやはり分裂しており，せいぜいかなり巧みに癒着させられているということであった。[17]

3.2.2　鬼頭梓氏設計図面：地下書庫・吹き抜け

これら前段階を経て，東京経済大学図書館の設計で大きな成果をあげ，当時図書館建築において注目を集めていた鬼頭氏が設計に携わる。鬼頭氏に声がかかる経緯は「日本ファイリングの営業マンが，東北大学の施設部長を紹介してくれた」[18]ということが発端である。東京経済大学図書館を見学した本学の施設部長は，鬼頭氏に設計を強く依頼し，氏は依頼者の心意気を感じたという。この結果，当館は国立大学における初の民間設計委託の例となった。

鬼頭氏に設計を頼むにあたり，これまでの4案は一切示されなかったという。施設部が第4次案を示してから以後，移転や概算要求の関係で約3年の時間が経っていた。図書館側も海外の調査等や館内議論をその間進めることができ，それらを踏まえた上での鬼頭氏登場であったという。

鬼頭氏の最初のプラン（第5次案：図2）から，メインエントランスとメインフロアは1階，書庫は地下，広い吹き抜けを入れる，といった方針は定まっていた。これによりこれまでの案と比較して，建物の全体は水平的になった。

3.2.3　鬼頭梓氏設計図面：3ブロック化

鬼頭設計第3次案（第8次案：図3）から，現在の当館にも共通する北，中，南の3つのブロックに分かれるプランが現れてくる。つまり，中央が吹き抜けの1階のみで，北と南に2階がある構造である。また地下書庫は，2層のものになった。

この頃，鬼頭氏は，当館調査研究室原田隆吉助教授ほかとともに，欧州はドイツを中心とした大学図書館を見学していた。その後，この3ブロックプランが定着したというが，欧州の大学のどこに影響を受けたかは，特に記録に残っていない。

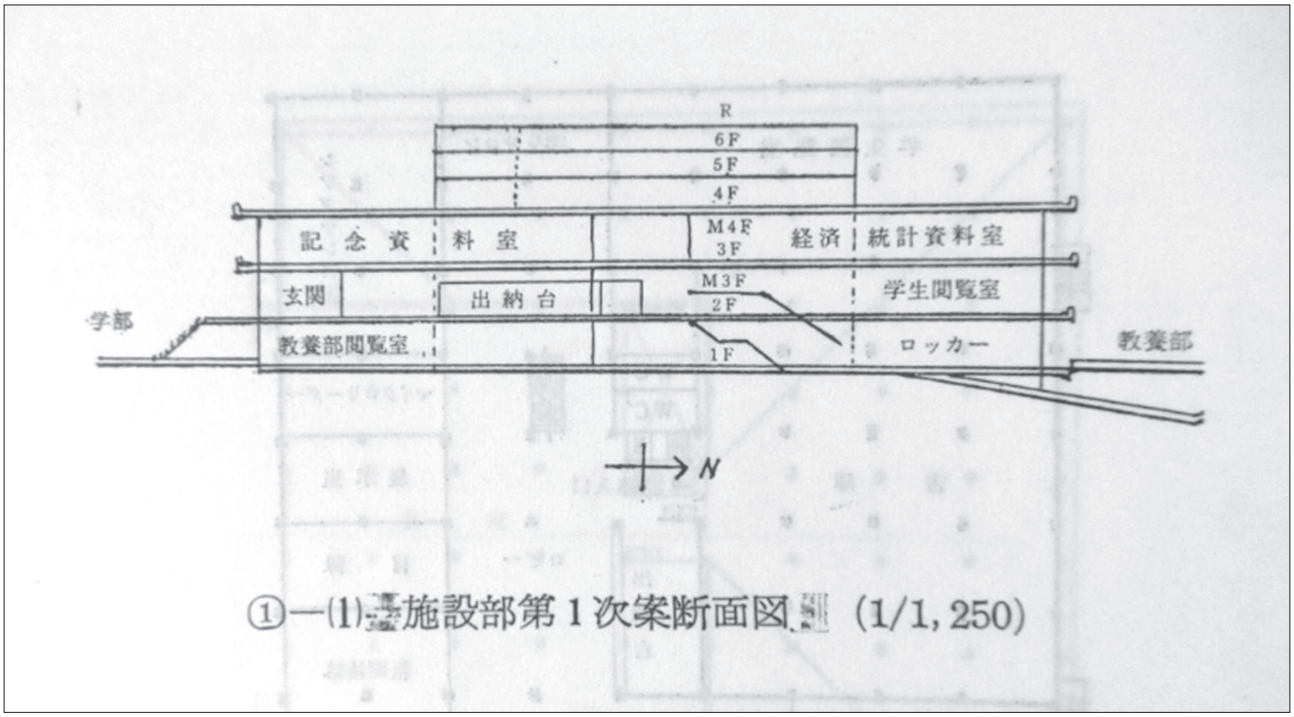
3.2.4　鬼頭梓氏設計図面：現在の形へ

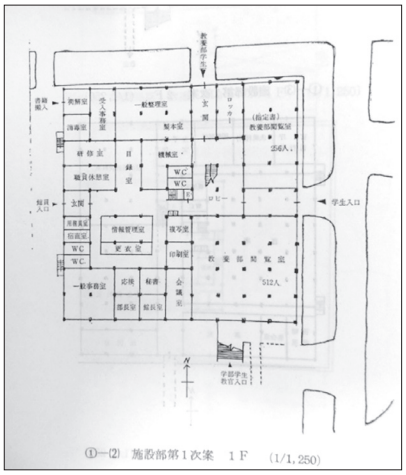
前節で示した南北を3ブロックに分ける基本設計は，後期の案（鬼頭設計第4次から第10次）にかけて，細部が詰められていく。特に＜学習用図書館機能＞と＜研究用図書館機能＞とが共存する図書館という課題に対して，北に＜学習用図書館機能＞，南に＜研究用図書館機能＞と機能が分かれて配置され，その中央を共用のスペースとして，広大で平坦な1階が配置される。

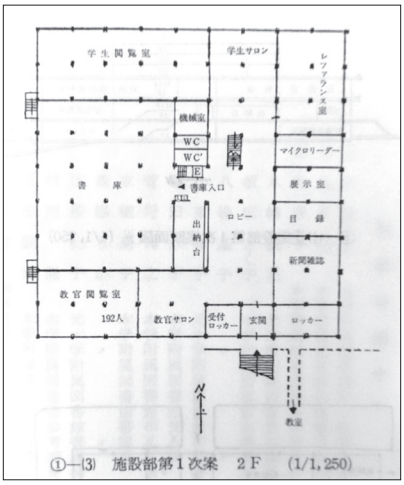
その広大さを実現する仕組みは，書庫を地下に置くことで，上からの加重をかけない工夫である。上の階に書庫を置くのと比較して，地下に書庫を配置することは，耐荷加重を少なく済ませることができる。それによって少ない柱で天井を支えることが可能となり，現在のメインエリアのような，広く平らな高い吹き抜け空間を実現することができるのである。

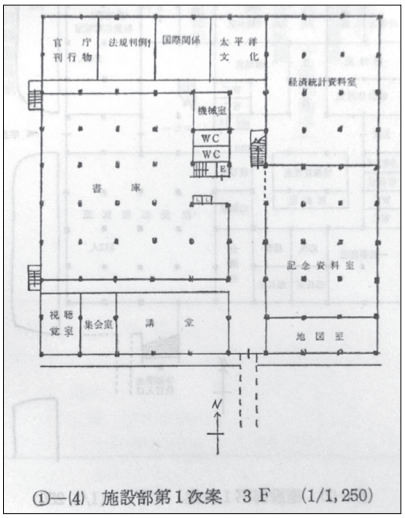
図4に示した鬼頭設計第6次案（第12次案）では，すでに現在の当館の構造がほぼ示されている。南側（左翼）1階は，事務室など管理スペース，つまり図書館員の領域が配置されている。同じく2階は，研究者閲覧室，特殊資料，調査研究室等が配置され，研究図書館機能を果たすエリアとなっている。北側（右翼）1階は，指定書閲覧室，同じく2階は，開架閲覧室となっており，

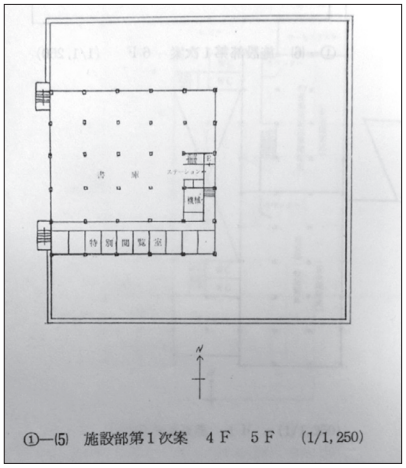
17　原田隆吉．東北大学附属図書館の新営における設計図段階．図書館学研究報告．7，p.230.
18　鬼頭梓ほか．建築家の自由．2008，p.22.


R
6F
5F
4F
記念資料室
M4F
3F
経済統計資料室
玄関
出納台
M3F
2F
学生閲覧室
学部
教養部閲覧室
1F
ロッカー
教養部
N
①―(1) 施設部第１次案断面図 (1/1,250)


①―(2) 施設部第１次案　１Ｆ　(1/1,250)


学生閲覧室
学生サロン
レファランス室
機械室
WC
WC'
書庫
マイクロリーダー
書庫入口
展示室
ロビー
目録
出納台
新聞雑誌
教官閲覧室
192人
教官サロン
受付ロッカー
玄関
ロッカー
教室
①―(3) 施設部第１次案　２Ｆ　(1/1,250)


官庁刊行物
法規判例
国際関係
太平洋文化
経済統計資料室
機械室
WC
WC
書庫
記念資料室
視聴覚室
集会室
講堂
地図室
①―(4) 施設部第１次案　３Ｆ　(1/1,250)


書庫
特別閲覧室
①―(5) 施設部第１次案　４Ｆ　５Ｆ　(1/1,250)

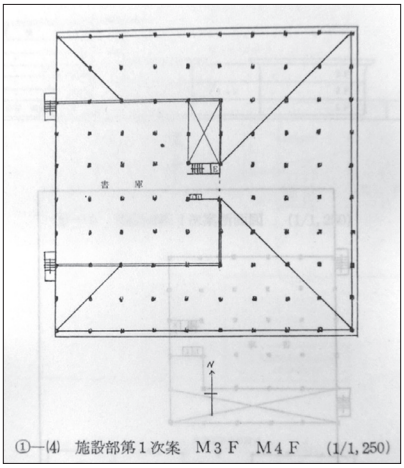
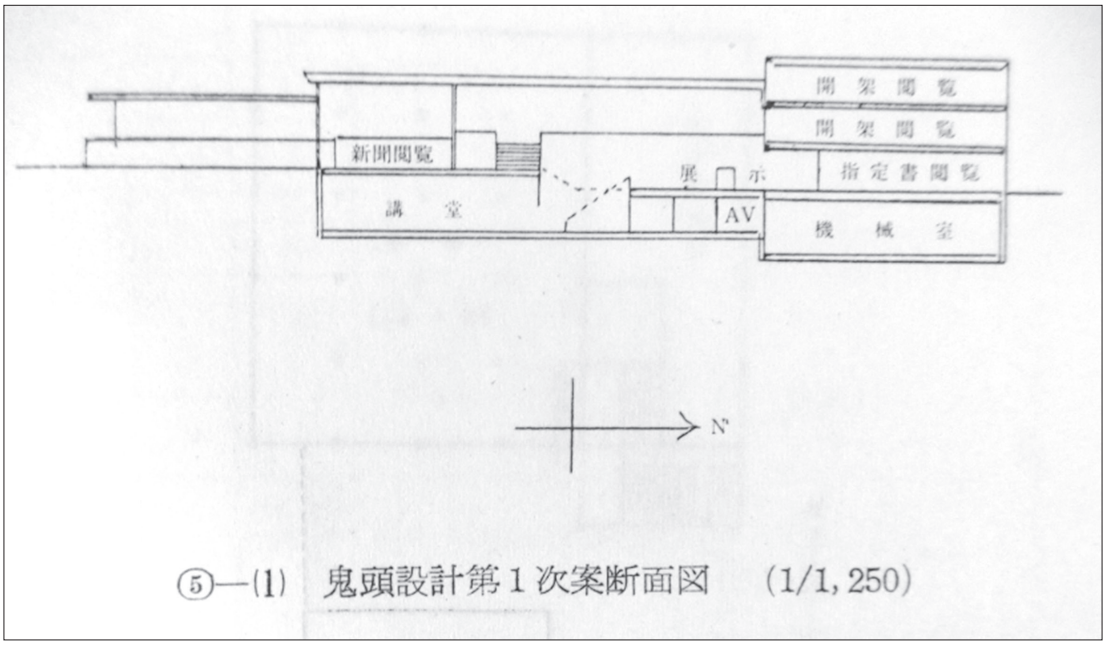
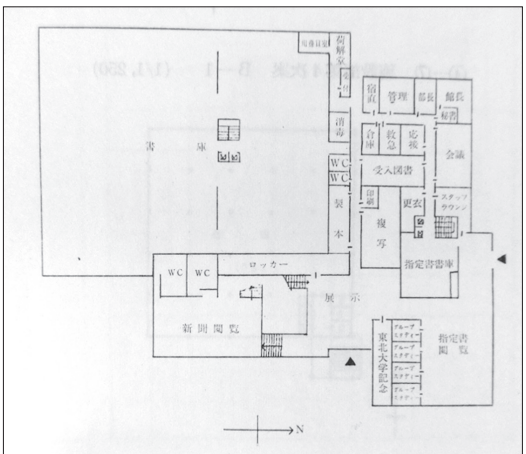

書庫
①―(4) 施設部第１次案　Ｍ３Ｆ　Ｍ４Ｆ　(1/1,250)

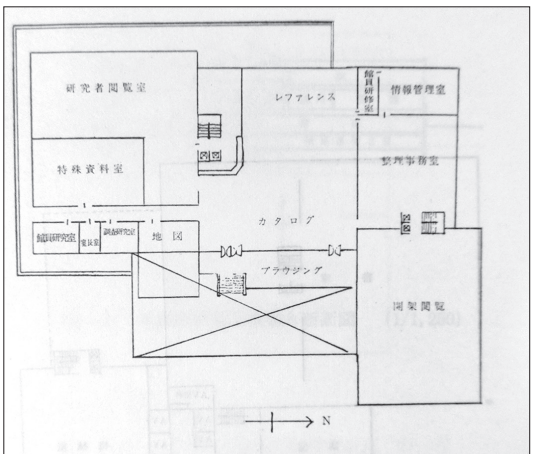
図１　施設部第１次案



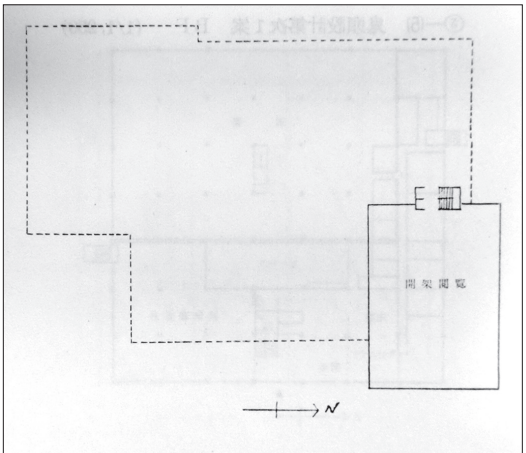
⑤—(1)　鬼頭設計第１次案断面図　(1/1, 250)



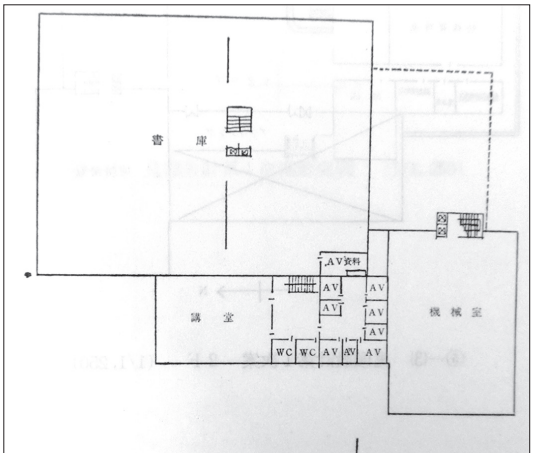
⑤—(2)　鬼頭設計第１次案　１Ｆ　(1/1, 250)



⑤—(3)　鬼頭設計第１次案　２Ｆ　(1/1, 250)

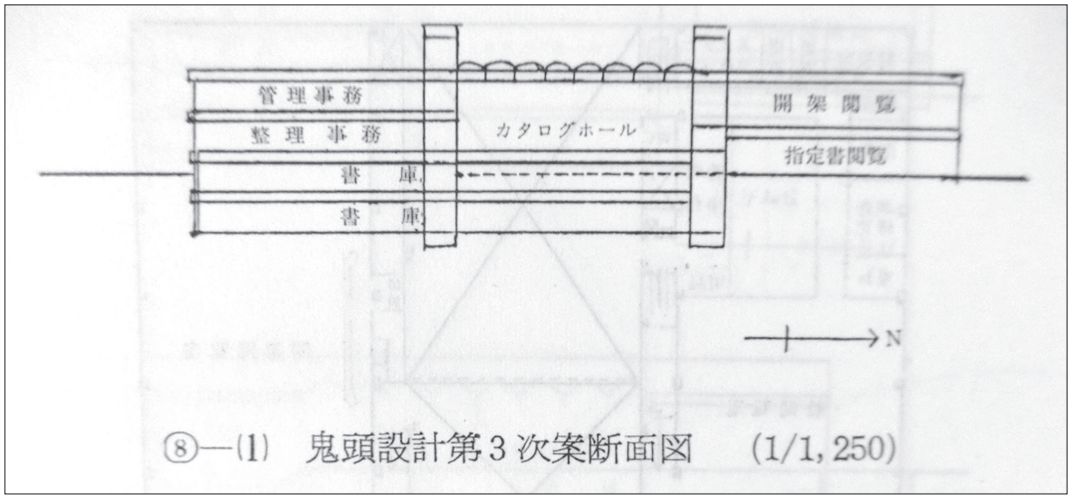


⑤—(4)　鬼頭設計第次１案　３Ｆ　(1/1, 250)

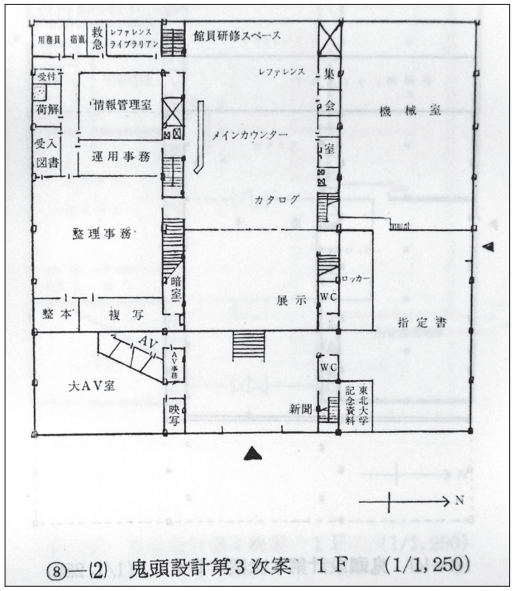


⑤—(5)　鬼頭設計第次１案　ＢＦ　(1/1, 250)

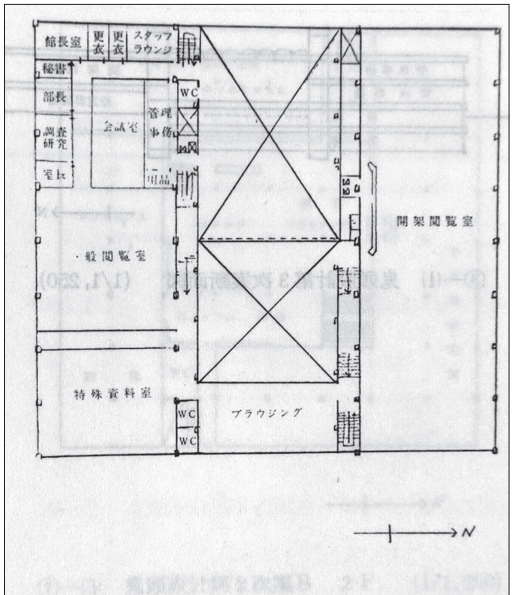
図２　鬼頭設計第１次案（第５次案）



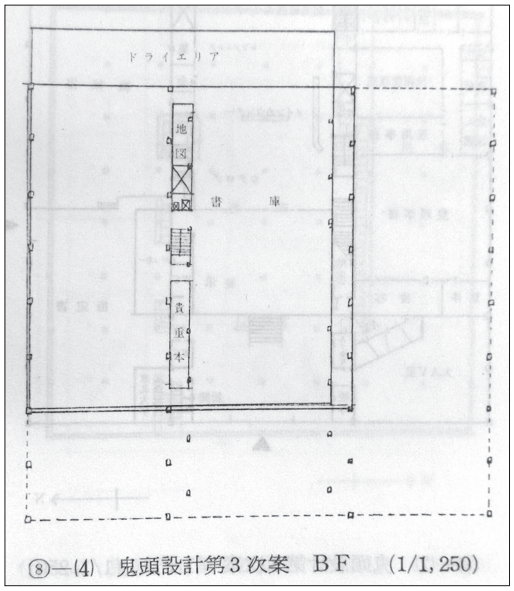
⑧—(1)　鬼頭設計第 3 次案断面図　(1/1, 250)



⑧—(2)　鬼頭設計第 3 次案　1 F　(1/1, 250)

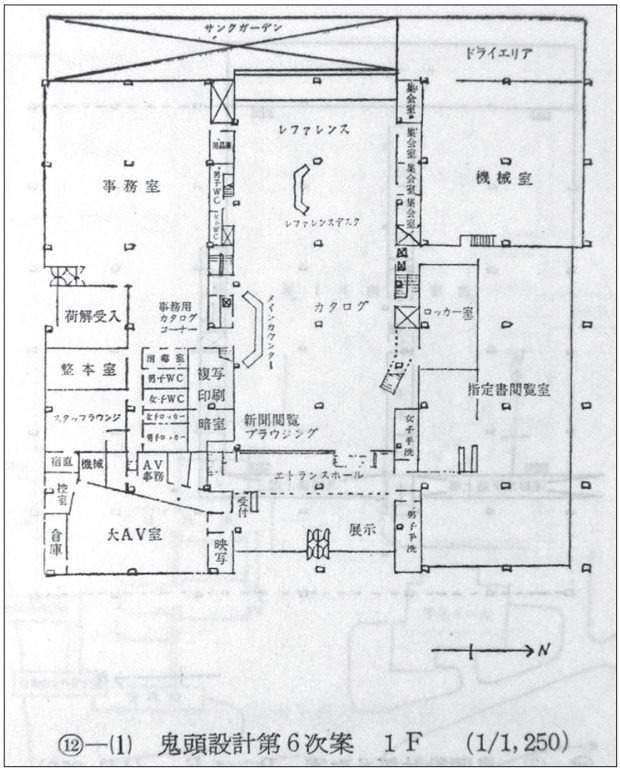


⑧—(3)　鬼頭設計第 3 次案　2 F　(1/1, 250)



⑧—(4)　鬼頭設計第 3 次案　B F　(1/1, 250)

図 3　鬼頭設計第 3 次案（第 8 次案）



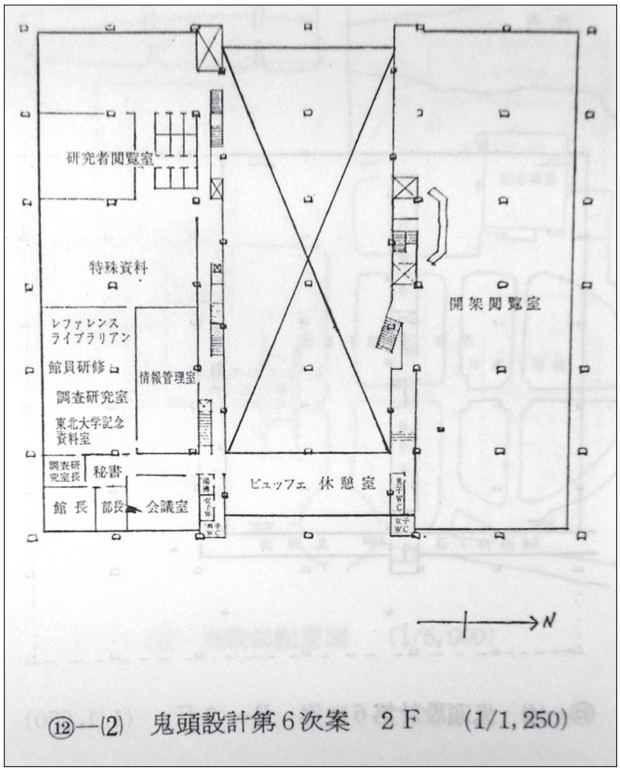


図4　鬼頭設計第6次案（第12次案）

ここは学生の学習図書館機能を果たす。中央は2階まで吹き抜けのカタログホール・レファレンスコーナーが平坦な空間に配置される。

そのほか興味深いのは，玄関2階には，ビュッフェが休憩室と一緒に配置されていることである。軽食提供スペースは，設計時点ではこのように構想されていたようで，平成27(2015)年のメインエントランス南側（左翼）シアトルズ・ベストコーヒー出店は，この当時の構想がついに実現したとも考えられるのではないか。

しかしこの第6次案では，これまでの鬼頭案では中央吹き抜けホールに柱を置かなかった案が継承されてきたものの，改めて中央に柱を立てることになった。これに対しては「構造上の問題があったのかもしれないが設計者としては残念だったかと思う。」[19] という原田の述懐が残っている。

3.2.5　鬼頭梓氏設計図面：劇場の2階席とライトコート（光庭）

鬼頭設計第8次案（第15次案：図5）では，劇場の2階席のような休憩スペースが，エントランスホール直上の東部分（写真4）と現グループ学習室付近直上の西部分（写真3）の2階に出現する。ここからはエントランスホール・メインエリアの全体を見渡すことができる。ここは現在，学生閲覧室2階の一部となっているが，館内全体を見渡すことができる見晴らしの良い閲覧席となっている。

また2階南側には北側に対になるよう同じく，東部分には休憩コーナー，西部分には階段の踊り場が形成される。以上4か所は，館内全体を見渡すスポットに現在もなっている。加えて，南側（左翼）の研究者閲覧室の中央部には六角形の階上庭園（ライトコート：光庭：写真5）が出現する。

以上のような現在の館内デザインのディティールに繋がっていくものが，この図面案から増えていくことが分かる。

3.2.6　鬼頭梓氏設計図面：六角形の導入

鬼頭設計第9次案（第16次案）に至ると，館内各所の壁に曲面が導入される。鬼頭氏はこの曲面に関して以下の通り述懐している。

ある日突然に両側の壁を折り曲げようと思いつい

19　原田隆吉．東北大学附属図書館の新営における設計図段階．図書館学研究報告．7，p.242.

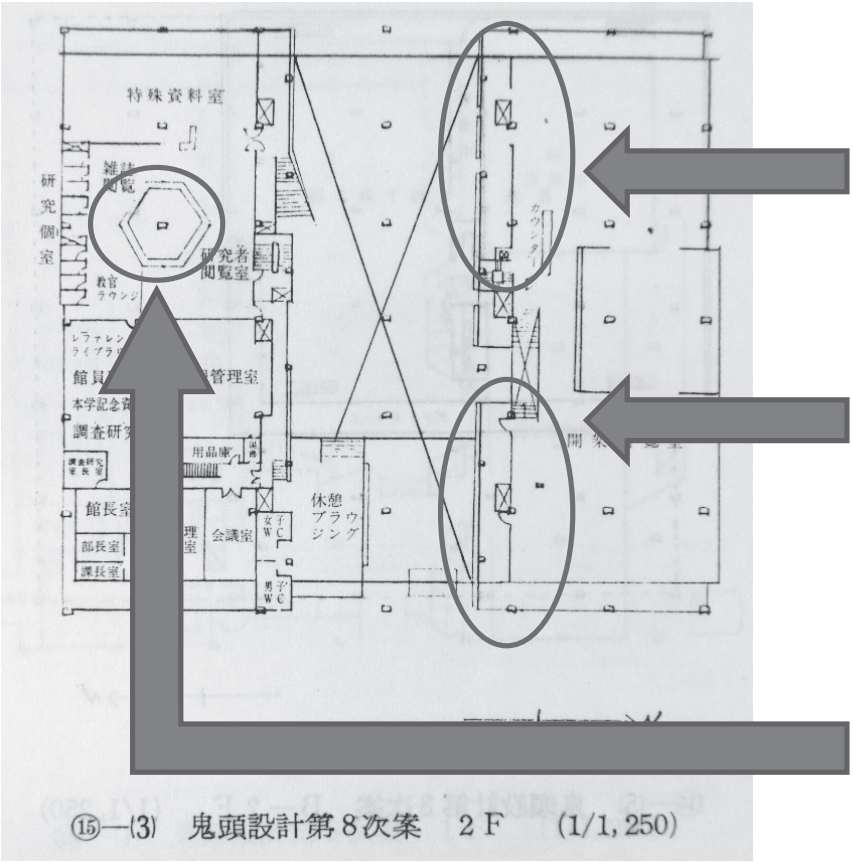


図 5　鬼頭設計第 8 次案（第 15 次案）2 階

写真 3　現在の 2 階北西側閲覧席

写真 4　現在の 2 階北東側閲覧席

写真 5　現在の 2 階ライトコート

て，そこにどんな脈絡があるのか，あったのか，自分でもよくはわからないままに，夢中でスケッチを書き上げた。多分これでよかったのだと今も思っている。[20]

以上の通り，鬼頭氏本人は壁を折り曲げる，と言っているが，これは具体的に言うと，各所に六角形やその半分の台形を入れた結果である。この六角形は，以下の様に構造的にも強度が高いという学内の支持も得て導入されたのみならず，デザイン的にも洗練されたものである，という評価がなされている。

この第 9 次案においていちじるしいのは，従来の長方形をもって直角的に組立てられていた設計が，相当部分において六角形を採用し斜の線を用いたものに変っていることである。六角形は力学的に理にかなっているという理科系の建築小委員もあって，概して好評であった。コンクリートの四角四面の堅苦しさに慣れた人々には，新しい変化に富んだ構成は，人をやわらかく導いて行ったり，やすらかな陰影をおびた凹みを快く感じたり，その空中へのはり出しの軽やかさを楽しんだり，実現を想像してなかなか魅力的であった。[21]

この六角形が，特に明確に分かる場所は，南側（左翼）2 階に鬼頭設計第 8 次案から出現する光庭である。他の個所，特にメインエリアの南北の壁は，六角形の半分の台形が当て嵌められていることが，よく見ると分かる。

鬼頭設計案は，以後第 10 次案まで作成され，それが最終案になった。現在の当館の建築の基本は，この最終案がもとになっている。ただ平成 26（2016）年 10 月のリニューアルオープンに至るまでの 43 年間で，内装等に変更が見られるため，最後に新営直後の図面を掲載して（図 6，図 7）[22]，当節を終えることにする。

20　鬼頭梓．共有のシステムとしての図書館．新建築．1976，51(8)，p.246.
21　原田隆吉．東北大学附属図書館の新営における設計図段階．図書館学研究報告．7，p.235-234.
22　東北大学附属図書館本館．図書館利用ハンドブック．東北大学附属図書館本館，1974，p.2-3.

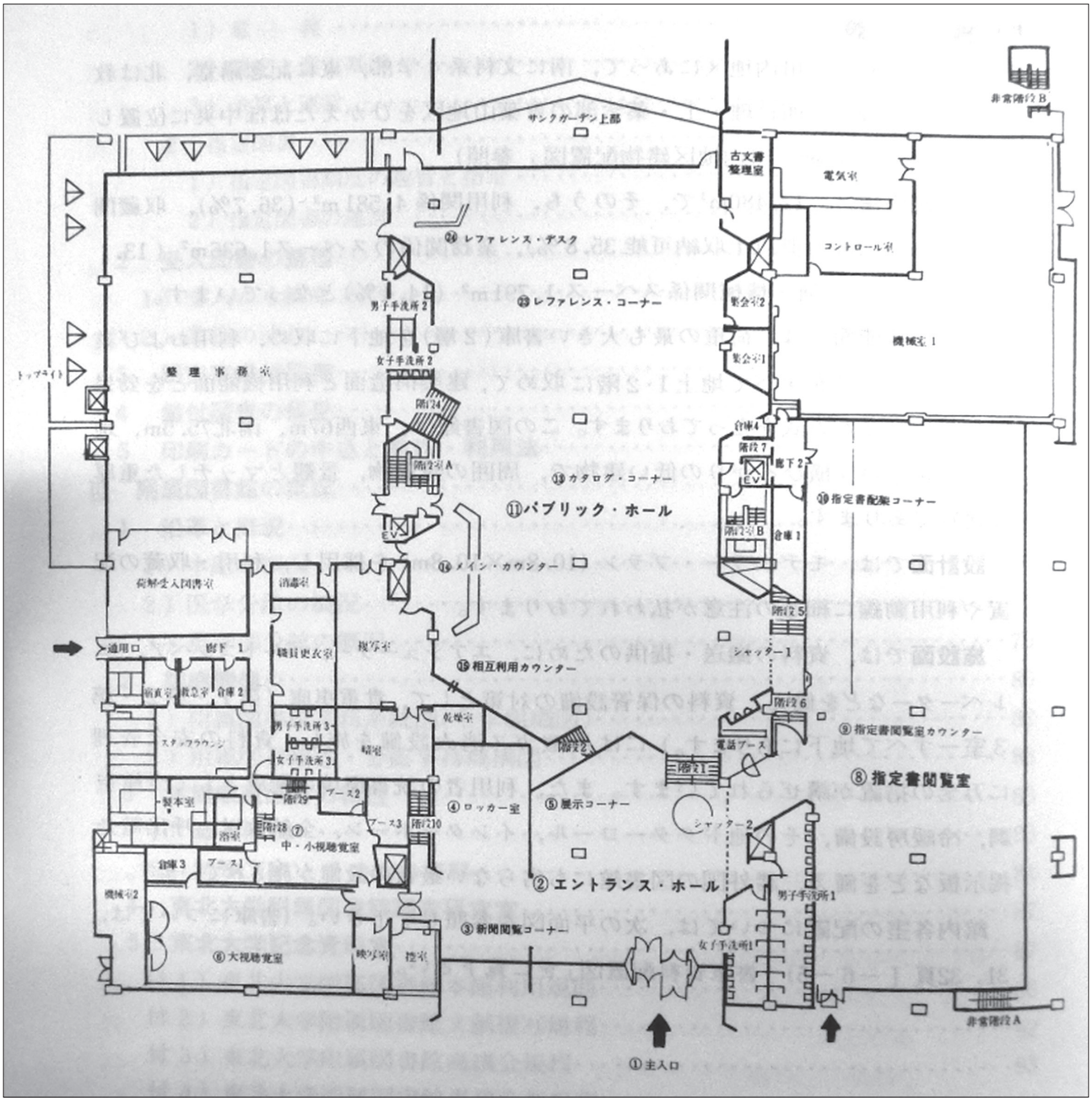


図 6　開館時の当館図面 1 階

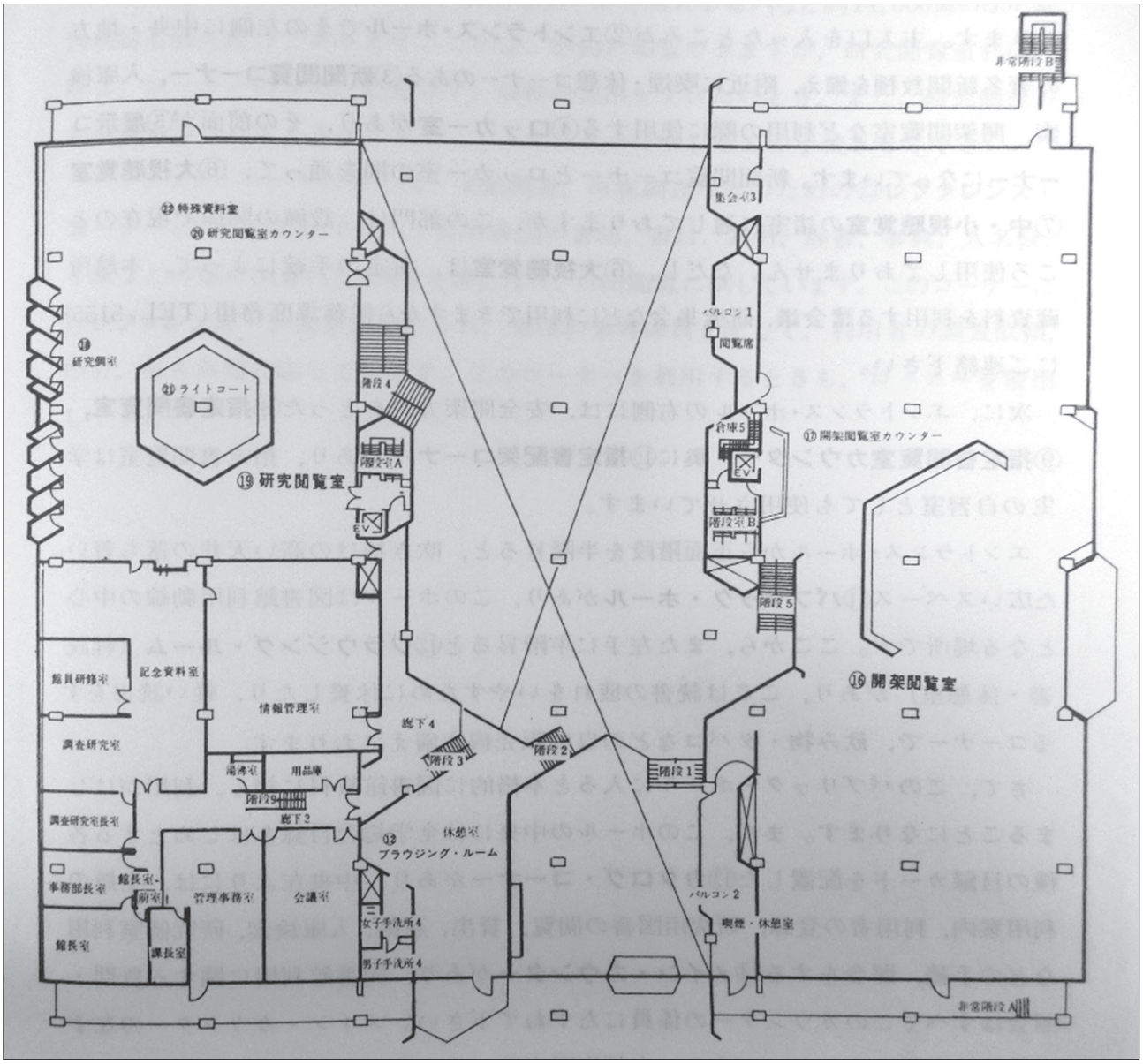


図 7　開館時の当館図面 2 階

4．当館に見られる鬼頭梓の図書館観

4.1　全体構造：とくに南北（左右）を繋ぐ公共空間・レファレンス・コーナー

入館して中央のゾーン（現在の状態：写真 6）は建設当時，レファレンス・コーナーやカタログホールが配置された広い広場のような空間となっていた。その南北（左右）は上下二層構造を取り，北側（右翼）1 階に指定書閲覧室，2 階に開架閲覧室を，南側（左翼）2 階に特殊資料室，研究者閲覧室を配置した。南側（左翼）1 階には事務室や AV 室が置かれた。学部学生のための＜学習図書館＞としての機能（エントランスから見て右手，北側）と，教官・大学院生のための＜研究図書館＞としての機能（エントランスから見て左手，南側）を明確に分離し，かつカード式目録群とレファレンス・デスクとレファレンス・コーナーを中心に配置して，2 つの機能の相互交流を図るという鬼頭氏と大学側の意図が，反映された設計であると言える。

また当時最新の工法を採用した地下 2 階分の積層書庫により，増加する資料の加重への対応を可能にした。その結果，地上部に建築する場合の柱の数を抑えることが可能となり，メインエリアの広大な空間を現在の柱の数のみで支える事が可能となった。

4.2　コンクリート打ちっぱなし

当館の構造上・デザイン上の大きな特徴は，何といってもコンクリート打ちっぱなしの灰色の建物であろう（一例：写真 7）。これは，鬼頭氏が最初に携わった東京経済大学図書館と同じスタイルである。これについては「すべてコンクリートの打ちっぱなしにしようときめていた。その質感だけが頼りで（後略）」[23] とあるように，鬼頭氏としては確固としたものがあったようだ。

鬼頭氏は，このコンクリート打ちっぱなしの建物のほか，煉瓦を活用した図書館を多く建てている（一例：写真 8）。しかし，当館には煉瓦を一切使用していない。

これまでも数度述べてきたように，鬼頭氏の図書館建築の方針は，＜フラット・フロア，ノーステップ＞で，可能な限り柱を立てず，広く平坦な空間を理想としている。しかしその理念を究めて行くと「それではまるで倉庫か体育館の様なもので，図書館としては最も相応しくない空間」[24] となり，ある種非常に無味乾燥なも

写真 6　現在のメインエリア（奥が学習機能，手前が研究機能，中央がその相互交流の場）

写真 7　館内各所に見られるコンクリート打ちっぱなし

写真 8　同じく鬼頭氏が手掛けた神戸市立中央図書館（当館のような窓・コンクリートに，煉瓦が加わった例）

23　鬼頭梓．共有のシステムとしての図書館．新建築．51(8)，p.246.
24　鬼頭梓ほか．建築家の自由．2008，p.52.

のになってしまう。その際に，コンクリートや煉瓦といった質感を持った材質を使うことによって，可能な限り人間的な空間を創出しようとしたのである。この手法は，次節の窓による採光にも通じるところがある。

4.3　窓

エントランス壁面には大きなガラス窓が採用され，外から見ると外枠以外が総ガラス張りである。そのエントランスから直進すると，西側奥も同じくガラス張り，天井は吹き抜けと天窓を使った太陽光の差し込む開放的な空間となっている。

これは，鬼頭氏によると「象牙の塔に光を入れる」[25]の考えのもと，大学の図書館に大いに自然光を入れようとした結果である。自然光が多量に入るためコンクリート打ちっぱなし，という灰色中心の配色であっても館内は明るい空間が維持できるのである（一例：写真9）。これも前節で説明したような，＜ある種無味乾燥な空間＞を避けて＜人間的な空間＞を演出する工夫である。

開館当時，西側には2号館が無かったため，青葉山の緑を入館してすぐに見通せたようである（写真10）。鬼頭氏は日野市中央図書館でもこの手法を使い，富士山が望める閲覧室を創っている。

面白いことに，当館の西部分の1階サンクガーデンの下に当たる地下1階書庫の北西部分には，地下にも関わらず西側から掘り込んである場所があり，ここに全面窓が取り付けられている（写真11）。地下にまで光を入れたかった，という独特の拘りを感じるが，当時を知る元職員によると，増築予定の個所であったそうで，その後建築法の改定でこの部分からの増設が不可能となり，2号館建設に繋がって行く，とのことである。

4.4 メインエリア

次に＜フラット・フロア，ノーステップ＞の考えの反映である。中央の空間と2階の休憩室，学生閲覧室までに間仕切りは設けられておらず，局所的な床の高さの変化と折れ曲がった壁面だけでスペースが形成され，全体はあくまでひとつのつながった空間となっている（写真12）。玄関は，傾斜地の上に建っている以上，東側から西側に向けて上昇する斜面とそのための階段を避けることはできなかったものの，鬼頭氏の考えでは，可能な限り地面から平らに入館できるように，という構想で設計されている。最初施設部が建てた計画では2階にメインエントランスを設けて，階段を上がっていくスタイルが提案されたのであるが，このプラン

写真10　1階西側窓　かつては青葉山が眺望できたであろう

写真9　館内各所にある天窓

写真11　地下1階西側窓　地下書庫まで光を入れたかったのであろうか

25　鬼頭梓．共有のシステムとしての図書館．新建築．51(8)，p.246.

は排されているのである。

中央のゾーン両側の折れ曲がった壁面は，先述したように鬼頭氏いわく突然の思い付きであったそうだが，空間を広く見せる役割を果たしているようにも思われる。そのようなコンクリート打ちっぱなしの無機質な壁面を日光や照明の明かりが照らしているのである。

4.5　メインカウンター・玄関

＜図書館員のスペース＞と＜利用者のスペース＞の二つを繋ぐという場所として鬼頭氏は，カウンターを定義している。その考えの通り，メインエリアと事務スペースの間に大きなメインカウンターが設置されている。一方，カウンターからはフラットな図書館の空間を管理上見渡すことができなければならない，ともしている。その結果，北側（右翼）2 階には，新営時にカウンターが別途設けられていた。

一方，チェック機能を持つ玄関は，東向きに一つだけ設けられている（写真 13）。これは，当初計画にある北側から来る教養部学生（現在の 1-2 年生）のための玄関と，メインの玄関を別に設置するプランを排しているのである。

4.6　家具

鬼頭氏は家具も自身の建築事務所で設計していたが，当館設計時にはそれが叶わず家具を入札で調達することとなり，その点は心残りであったようだ。余程心残りであったようで，「家具の占める比重はたいへん大きい。比重が大きいというよりは，空間の表情や雰囲気は，建築と家具とが一体となって創り出すものなのだと言った方がよいだろう。(中略)それができなかった場合には――残念ながら日本ではその例は少くないのだが――その建築は，図書館としてはついに未完成の建築であったと言わざるをえない。」[26]「私たちの設計監理は，建物だけで終了した。家具外構の設計は余儀なく私たちの手を離れた。その意味でこれは私たちにとって未完の建築である。」[27] といった述懐を文章で残している。

最後に，当館は平成 14(2002) 年度日本建築家協会 25 年賞を受賞したことを申し添える。

写真 12　玄関から階段があるが，東側から西側まで間仕切りはなく，メインエリアはフラットである。

写真 13　玄関：利用者用は1つだけ設けられ，地面に対してはフラットである。

5．結論

鬼頭氏は，図書館の本質を考える上で，以下の点に悩んだという。

> 本というものは，本来一人で静かに読むべきものなのである。したがって図書館が本の場所である以上，そこではこの本のもつ本質的に内面的で個人的な性格が支配的でなければならないはずである。少なくとも，それをまったく欠いた空間では，いかに皆の場所であり，皆が共同して利用するのにふさわしい空間であったとしても，それでは図書館とはなりえない。こ

26　鬼頭梓建築設計事務所．図書館建築作品集．1984，p.20.
27　鬼頭梓．共有のシステムとしての図書館．新建築．51(8)，p.246.

こには現代の図書館が必然的に負わされている，避けがたい矛盾が存在しているのである。（中略）その雑踏をそのままに抱き込んで，いわば普段着のままの空間として，しかし同時にどこかしんとして本への畏敬に満ち，内面的で個人的な本の場所にふさわしい空間を創れないものかと，そんな半ば絵空事のようなことをいつも考え続けているのである。[28]

読書という行為が，きわめて個人的で内面的な精神活動であることは言うまでもない。それにふさわしい場所と雰囲気とを，この開放的な広場の中につくり出そうとすることは，パブリックでプライベートな，プライベートでパブリックな空間をつくろうとするに等しい。言葉の遊びのようにも見えて，だがそれこそまさに現代図書館そのものではないだろうか。[29]

この述懐は，活動エリアと静寂エリアの共存・両立に悩んで，発した言葉ではないかと推察する。鬼頭氏のこの煩悶に対して，平成26(2014)年のリニューアル大改修は，一つの回答であったのではなかろうか。つまり，この活動エリアと静寂エリアという2つのエリアを，厳密に2分したゾーニングで運営する，というものである。

その結果，＜きわめて個人的で内面的な精神活動としての読書（当館の場合，学習・研究と言い換えても良いと考える。）＞の場所と＜皆が共同して利用するのにふさわしい開放的で広場的な空間＞という場所の両方が館内に両立するのである。

むしろこの問題に悩んだ鬼頭氏が設計した当館であるからこそ，アクティブラーニングが導入された大学教育の一翼を担う，現在の大学図書館の概念に対応することが可能であったのではなかろうか。

中央のメインエリアに＜広場的で開放的，普段着で行けるような皆の広場＞を＜フラットスペース・ノーステップ＞で配置する。利用者はそこの＜皆の共有の空間＞で必要な営みを協働で行い，各人が各人のテーマで，館内の必要な場所に散って行くのである。

そして南北（左右）両翼の仕切りの向こうには，＜個人的で内面的な精神活動＞のスペースが控えており，そこで本への畏敬を感じつつ，個独に精神の深耕を行うのである。この仕組みは，現代においても全く色あせないどころか，ついに鬼頭氏の見たかったものが，日本の大学図書館に実現しつつあることの表れであるとさえ，感じるのである。

その結果，当館に訪れる者は，誰もが当館を45年前の建築であることに驚く，のではないであろうか。時代が，図書館の本質をふまえた鬼頭氏に追いついたのである。

しかし，ただ時代が追い付いただけではない。鬼頭氏が準備した＜柱が無く平面で広い空間＞にして＜自然光や質感のあるコンクリートを使った無味乾燥にならない人間的な空間＞は汎用性が高く，時代の変化に対応が可能である余裕のある空間である。その仕掛けを創った鬼頭氏の先見性はもちろんであるが，その空間を読み解き，その＜余白＞を活かしきった当館関係者の不断の試行錯誤もがあってこそ，今も当館が＜新しい＞のである。

6．おわりに

本稿は，当館新営時の記録資料の整理，まとめを附属図書館ワークスタディである佐藤貴啓（工学部2年）と渡辺真由（薬学部2年）両名が行った。そのまとめをうけ，本稿作成を吉植が行った。また，全体構成の校訂を附属図書館ワークスタディである上田夏実（経済学部2年）が行った。

なお本稿作成に際しての基礎資料は，元工学研究科都市・建築学専攻の下山光氏に提供頂き，助言を頂いた。また元情報管理課長松井好次氏には，本学学生時代を含めて長きに渡る職員時代の当館の経験・記憶に基づき本稿を確認して頂き，貴重な示唆を頂いた。ここで厚く御礼申し上げる。

28　鬼頭梓ほか．建築家の自由．2008，p.21.
29　鬼頭梓．共有のシステムとしての図書館．新建築．51(8)，p.246.